

南島原市文化財調査報告書 第23集

内野貝塚 (第一分冊)

—市道新田内野線道路改良事業に伴う発掘調査—

2021

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書 第23集

内野貝塚 (第一分冊)

—市道新田内野線道路改良事業に伴う発掘調査—

2021

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は市道新田内野線道路改良事業に伴い実施した内野貝塚発掘調査の調査報告書です。

島原半島の南端部には辻貝塚、稱檀貝塚、永瀬貝塚、三軒屋貝塚など複数の貝塚が存在します。内野貝塚もその一つです。

今回の発掘調査では、弥生時代後期を中心とした多数の土器、石製漁労具、鹿角やイノシシ歯などが出土しました。またカキやサザエ等からなる貝層も検出されました。

これまで積み重ねられてきた発掘調査の成果によって、島原半島南端部に散在する弥生時代の貝塚は、稲作ではなく漁労を生活の中心に据えた比較的小規模な集落によって形成されたと考えられています。今回の調査成果もそうした従来の見方を補強するものといえるでしょう。

本書が今後の歴史学研究の一助となり、またその成果が一般の方々の埋蔵文化財に対する理解に繋がれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたりご協力いただきました関係各位に心よりお礼申し上げ、発刊の挨拶といたします。

令和3年3月31日

南島原市教育委員会

教育長 永田 良二

例　　言

- 1 本書は、内野貝塚（長崎県南島原市加津佐町丁所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、南島原市建設課が事業主体である市道新田内野線道路改良事業に伴い、南島原市教育委員会が調査主体として次の期間で実施した。

　　試掘・範囲確認調査 平成29年5月23日～平成29年6月8日

　　本調査 令和元年11月9日～令和2年2月28日

- 3 調査の体制と担当は、次の通りである。

調査体制	南島原市教育委員会 教育長	永田 良二
	教育次長	深松 良藏（平成29年度～平成31年度）
		栗田 一致（令和2年度）
	理 事	宮崎 誠（平成31年度）
文 化 財 課	課 長	松本 慎二（平成29年度～平成31年度）
		岡野 博明（令和2年度）
文 化 財 班	班 長	木村 岳士（平成29年度）
		末永 透（平成30年度）
		鬼塚 俊範（平成31年度）
		梶原 知治（令和2年度）
調査担当	試掘・範囲確認調査	文化財課文化財班 副参考（学芸員） 荒木 伸也
		同 上 主事（学芸員） 小川 康晴
本調査		文化財課文化財班 副参考（学芸員） 伊藤 健司
		同 上 主事補（学芸員） 竹村 南洋
整理調査		文化財課文化財班 主事（学芸員） 小川 康晴
		同 上 主事（学芸員） 竹村 南洋

- 4 試掘・範囲確認調査の土層断面図作成及び写真撮影は荒木、小川が作成した。本調査の土層断面図、遺構平面図の作成と製図及び航空写真的撮影は、扇精光コンサルタンツ株式会社に委託した。写真撮影は、伊藤、竹村が行った。
- 5 石器・骨角器類の実測図作成と製図並びに一部の土器実測は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。その他の土器実測・拓本並びに土器実測図の製図は竹村が行った。遺物の写真撮影は、小川、竹村が行った。
- 6 整理調査にあたっては、立石和也（株式会社埋蔵文化財サポートシステム調査課）、中尾篤志（長崎県学芸文化課）のご助言を得た。ここに記して、感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）
- 7 本書に関する遺物・図面・写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室で保管している。
- 8 本書の執筆は、小川、竹村で分担した。編集は、小川による。

本文目次

第Ⅰ章 位置と環境（竹村）	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第Ⅱ章 試掘・範囲確認調査（小川）	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査方法	4
第3節 調査成果	4
第Ⅲ章 本調査	6
第1節 調査経過（竹村）	6
第2節 基本層序（竹村）	6
第3節 遺構（竹村）	8
(1) VI層上面検出遺構	8
(2) VII層上面検出遺構	8
第4節 包含層出土遺物	10
(1) 土器・土製品（小川）	10
(2) 石器（小川）	23
(3) その他（竹村）	26
※本調査において検出した貝層から出土した遺物、自然科学分析、調査全体の総括等について、第二分冊に掲載する。	

挿図目次

第1図 内野貝塚周辺の地形図 (S=1/25,000)	1
第2図 島原半島南部の主要遺跡分布図 (S=1/200,000)	3
第3図 調査坑配置図 (S=1/2,000)	5
第4図 調査坑土層断面図 (S=1/60)	5
第5図 調査区西壁土層断面図 (S=1/100)	7
第6図 試掘・範囲確認調査と本調査の土層対応関係	8
第7図 遺構配置図 (S=1/400)	9
第8図 SP2 遺構実測図 (S=1/20)	9
第9図 SP5 出土遺物実測図 (S=1/3)	9
第10図 包含層出土土器実測図① (S=1/3)	10
第11図 包含層出土土器実測図② (3 : S=1/3, 4~7 : S=1/4)	11
第12図 包含層出土土器実測図③ (S=1/3)	12
第13図 包含層出土土器実測図④ (21~30 : S=1/3, 31~33 : S=1/4)	13

第14図	包含層出土土器実測図⑤ (S=1/3)	14
第15図	包含層出土土器実測図⑥ (S=1/3)	15
第16図	包含層出土土器実測図⑦ (S=1/3)	16
第17図	包含層出土土器実測図⑧ (S=1/3)	17
第18図	包含層出土土器実測図⑨ (S=1/3)	18
第19図	包含層出土土製品実測図 (S=1/3)	19
第20図	包含層出土石器実測図① (S=1/3)	24
第21図	包含層出土石器実測図② (7 : S=2/3, 8~14 : S=1/3)	25
第22図	包含層出土その他遺物実測図 (1 : S=1/1, 2~5 : S=2/3, 6~7 : S=1/3) ..	26

表 目 次

第1表	遺構内出土遺物観察表.....	8
第2表	包含層出土土器・土製品観察表①.....	20
第3表	包含層出土土器・土製品観察表②.....	21
第4表	包含層出土土器・土製品観察表③.....	22
第5表	包含層出土石器観察表.....	23
第6表	包含層出土ガラス小玉観察表.....	26
第7表	包含層出土獸骨類観察表.....	26

図 版 目 次

図版1	遺跡上空から岩戸山方向を望む（北から）	29
図版2	試掘・範囲確認調査調査坑土層	30
図版3	本調査写真①	31
図版4	本調査写真②	32
図版5	包含層出土土器・土製品①	33
図版6	包含層出土土器・土製品②	34
図版7	包含層出土土器・土製品③	35
図版8	包含層出土土器・土製品④	36
図版9	包含層出土土器・土製品⑤	37
図版10	包含層出土土器・土製品⑥	38
図版11	包含層出土土器・土製品⑦	39
図版12	包含層出土土器・土製品⑧	40
図版13	包含層出土石器	41
図版14	包含層出土その他遺物	42

第Ⅰ章 位置と環境

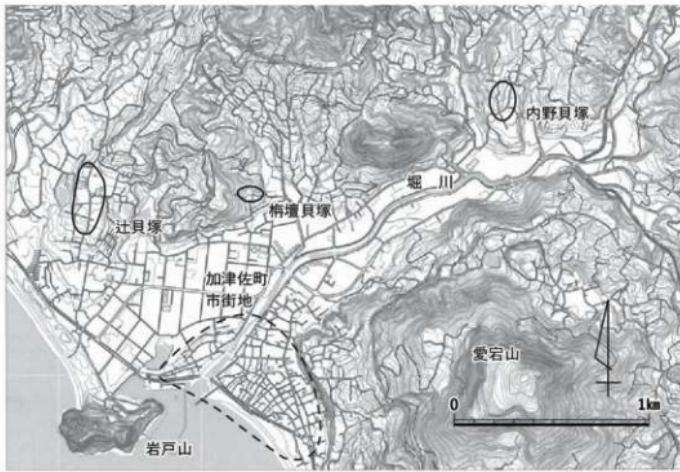
第1節 地理的環境

内野貝塚は島原半島の南端部に位置し、行政上は南島原市加津佐町に属している。

島原半島は長崎県南東部に位置するソラマメ型の半島である。半島の全周は約100kmあり、長崎半島とは愛野地峡と呼ばれる約5kmの区間で接続している。周囲には橘湾や有明海といった波の穏やかな内海が広がっており、それらを介して熊本平野、佐賀平野、長崎半島などと通じている。一方で半島の南側、天草諸島との間は早崎瀬戸と呼ばれ、比較的潮流が速い海域となっている。

島原半島南部の地勢は、河川沿いに平野・段丘が発達している地域と、海岸まで山地が迫り海食崖がみられる地域とに大きく分けることができる。このうち前者には、有馬川流域や堀川流域などがあり、内野貝塚は堀川流域にある。

遺跡が立地しているのは、堀川の中流付近にある南側に伸びる舌状台地の段丘面上で、標高は30m～40m前後である。この舌状台地の段丘崖下には堀川及びその支流が蛇行し平野部を形成している。遺跡から海岸までの距離は約2kmあるが、間に障害となるような地形がないため、海岸の目印となる岩戸山を視認することができる。なお、遺跡は台地上に所在しているが、今回の調査では調査区の南側において湧水が確認された。現在、台地の先端部付近は主に水田として利用されている。



第1図 内野貝塚周辺の地形図 (S=1/25,000)

第2節 歴史的環境

第2図に沿って島原半島南部の主要な弥生時代遺跡をみていく。

原山支石墓群は、繩文時代から弥生時代への移行期の遺跡で、標高250mほどの丘陵上の平地に立地し、大きく3群に分かれている。戦後の開墾によって遺跡の一部が破壊されているが、破壊後の聞き取り調査などによると、遺跡全体で支石墓が約100基以上、石棺墓が約50基、石蓋土壙墓が約70基程度存在していたようである。残存している部分について1950年代以降、数次にわたって調査が行われ、方形に近い粗製の箱式石棺や小児甕棺などが確認されている。しかし、人骨については検出していないため、どのように埋葬されていたのかは諸説あり、極端な屈葬または火葬であったのではないかと推測されている。支石墓・石棺墓という新しい墳墓形態を導入しつつも、葬法については繩文時代の伝統的な葬制をとっていた遺跡として理解されている。

北岡金比羅祀遺跡は有馬川南岸の標高4～8mほどの低平地に立地する。1909年に石切りをした合口甕棺が発見され中から銅劍1振が出土したと伝えられており、1979年の調査では弥生時代中期の甕棺墓などが出土している。

今福遺跡は、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての時期を盛期の1つとする遺跡で、標高10～30mほどの河岸段丘上に立地する。県道改良工事に伴い1978年から1981年にかけて長崎県教育委員会が発掘調査を行い、遺構として、竪穴式住居跡2棟、ドングリ貯蔵穴1基、甕棺5基、土壙墓1基、環濠1条などを検出した。遺物としては多量の弥生土器のほかに、双角状縄器と呼ばれる漁労用の石器が約200点、石包丁が10点出土している。遺構・遺物の内容から当遺跡が島原半島南部における中心的集落であったと考えられ、報告者である宮崎は当遺跡について「半農半漁型の集落」と評価する一方で、同時代の周辺の遺跡群については小規模かつ貝塚を形成するものが多いことから「海浜集落としての性格」を有していたと指摘している（宮崎1986）。

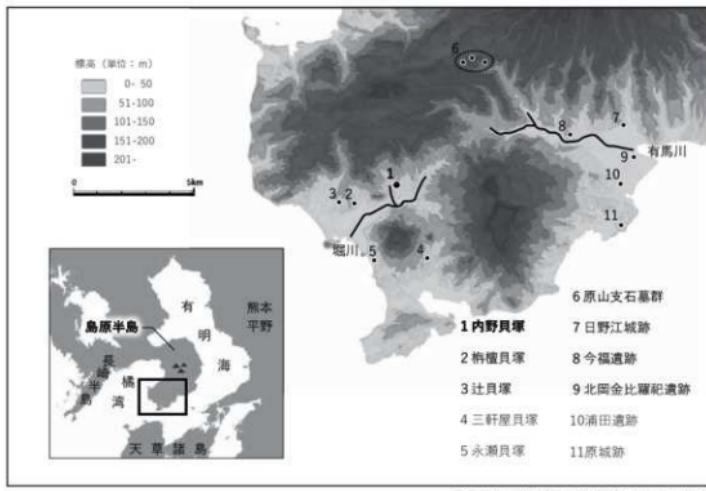
浦田遺跡は、有馬川南岸の低湿地に立地する。近年、個人住宅建設に伴い調査が行われ、弥生時代後期の土器、木製又鋤、ドングリ貯蔵穴、板列遺構などが検出された。板列遺構は畦畔など営農にかかわる水利施設の構造の一部である可能性が報告書中に指摘されている。

島原半島南部には、標高10～40mほどの丘陵上に内野貝塚、辻貝塚、梅檀貝塚、永瀬貝塚、三軒屋貝塚といった貝塚が多く形成されている。辻貝塚では、小学校の運動場造成工事に伴い1990年に長崎県教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代後期前葉から弥生時代終末の土器、大型の管状土錘、双角状縄器などが出土した。永瀬貝塚では、戦前の調査では繩文時代中・後期と弥生時代中・後期の2時期の土器が出土したとされているが、1993年に長崎県教育委員会が行った調査では土器は繩文土器のみが確認され、弥生土器は確認されていない。永瀬貝塚における1993年の調査では貝層も検出され、その構成は砂泥性のハマグリを主体としつつもわずかにサザエ・カキ・アワビなどの岩礁性貝類が含まれていることが報告されている。

時代は下るが、有馬川流域は、戦国時代に肥前を代表する大名に成長した有馬氏の本拠地でもある。日野江城跡及び原城跡は有馬氏の拠点的な城郭で、原城跡については1637年に起きた島原・天草一揆の舞台となったことでも知られている。

【参考文献】

- 小川慶晴 2018『浦田遺跡』南島原市文化財調査報告書第15集 南島原市教育委員会
 高野晋司 編 1981『国指定史跡原山支石墓群 環境整備事業報告書』北有馬町教育委員会
 寺田正剛 1996『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第121集 長崎県教育委員会
 長崎県教育委員会 1997『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』
 古田正隆 1981『北岡金比羅祀遺跡調査報告』南有馬町文化財調査報告第1集 南有馬町教育委員会
 宮崎貴夫 編 1984『今福遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第68集 長崎県教育委員会
 宮崎貴夫 編 1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会
 町田利幸・宮崎貴夫 編 1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
 村川逸郎 編 1991『辻貝塚』加津佐町文化財調査報告書第1集 加津佐町教育委員会



第2図 島原半島南部の主要遺跡分布図 (S=1/200,000)

第Ⅱ章 試掘・範囲確認調査

第1節 調査に至る経緯

南島原市加津佐町丁において、市建設部建設課により市道新田内野線道路改良事業が計画された。計画は、畠地・田地間をおよそ南北に走る市道の拡張工事であり、道路両脇の石積みを撤去し拡幅・舗装を行うものであった。

事業計画地は、路線南側の一部が埋蔵文化財包蔵地である内野貝塚の範囲に含まれていることから、平成29年度に南島原市教育委員会文化財課が主体となって試掘・範囲確認調査を実施した。

第2節 調査方法

路線計画の対象地内において、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の調査坑を1箇所、 $1\text{m} \times 4\text{m}$ の調査坑を7箇所、それぞれ任意の地点に設定し、調査を行った。TP.4～8の調査坑は遺跡範囲内である。

調査は全て人力によって行い、各層位ごとに掘削し遺構・遺物の有無を確認した。写真撮影は必要に応じて隨時行い、各調査区の完掘ごとに土層断面図を作成した。

第3節 調査成果

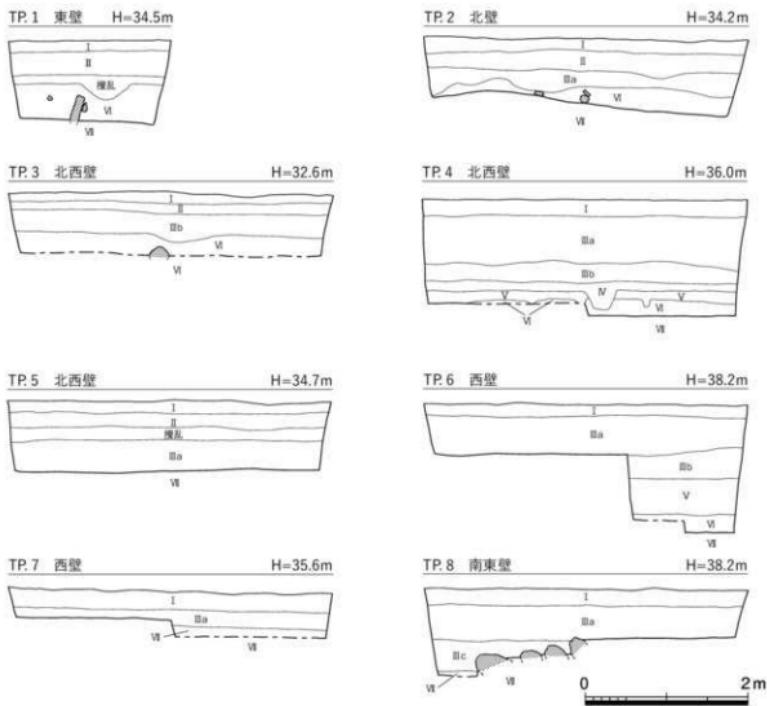
試掘・範囲確認調査によって得られた基本層序は以下のとおりである。

- I 層 暗褐色土。耕作土。
 - II 層 黄褐色土。鉄分やマンガンの影響を受ける。水田の底土。
 - IIIa層 黄褐色土。現代の造成土。ビニール片等を含む。
 - IIIb層 灰黄褐色土。現代の造成土。ビニール片等を含む。
 - IIIc層 黄褐色土。近現代の造成土。
 - IV 層 暗灰褐色土。少量の摩耗した遺物を含む。TP.4にのみ確認。
 - V 層 黒褐色土。遺物包含層。TP.4, TP.6のみ確認。
 - VI 層 赤褐色土。無遺物層。
 - VII 層 黄褐色土。風化作用を受けた砂礫を含む。
- I層～IIIc層は近現代以降の層である。傾斜のきつい山腹一帯に田畠を開くため、複数回にわたって造成を行ったものと考えられる。
- IV層はTP.4でのみ確認しており、層上部を造成によって削平される。出土遺物が土器細片10点程度と少量かつ摩耗しており、詳細な時期は判別できなかった。
- V層はTP.4とTP.6において確認した。出土遺物の量が他層に比べ顕著であり、TP.4, TP.6併せて150点程度の遺物を確認した。中でも「く」の字状の口縁部を持つ土器片を複数確認しており、弥生時代後期に相当するものと考えられる。
- VI層は赤褐色の無遺物層であり、層上面に複数のピットを有する。遺構の覆土は全てV層土と同様である。
- VII層はしまりの強い黄褐色土で、風化した砂礫を含む。

今回の調査では、TP.4とTP.6において遺物包含層を確認したため、その周辺 288m^2 での本調査が必要であると判断した。現地の状況や調査成果から、道路西側の石積みより下部はVII層まで切土を行っていると考えられ、石積みから上部のみ本調査が必要と判断した。



第3図 調査坑配置図 (S=1/2,000)



第4図 調査坑土層断面図 (S=1/60)

第Ⅲ章 本調査

第1節 調査経過

試掘・範囲確認調査の結果をもとに、令和元年11月9日から令和2年2月28日にかけて本調査を実施した。調査面積は288m²である。調査の前半と後半で担当者が代わっており、調査開始日から令和2年2月13日までは伊藤が、同年2月14日以降は竹村が担当した。

調査区画の設定にあたっては、調査区全体を南北方向8mごとの間隔で区切り、最北部を1区とし、以降、順に11区まで設定した。調査の進展に伴い、6区全体及び7区北側において貝層が検出されたため、この範囲についてはさらに細分した小さな調査区画を設定した（以降、この細分した小さな調査区画を小区画と呼ぶ）。6区は6A区から6H区まで8つの小区画から成り、それぞれの小区画の長さは1mである。7区は7A区から7C区の3つの小区画から成り、7A区と7B区の長さは1m、7C区の長さは6mである。

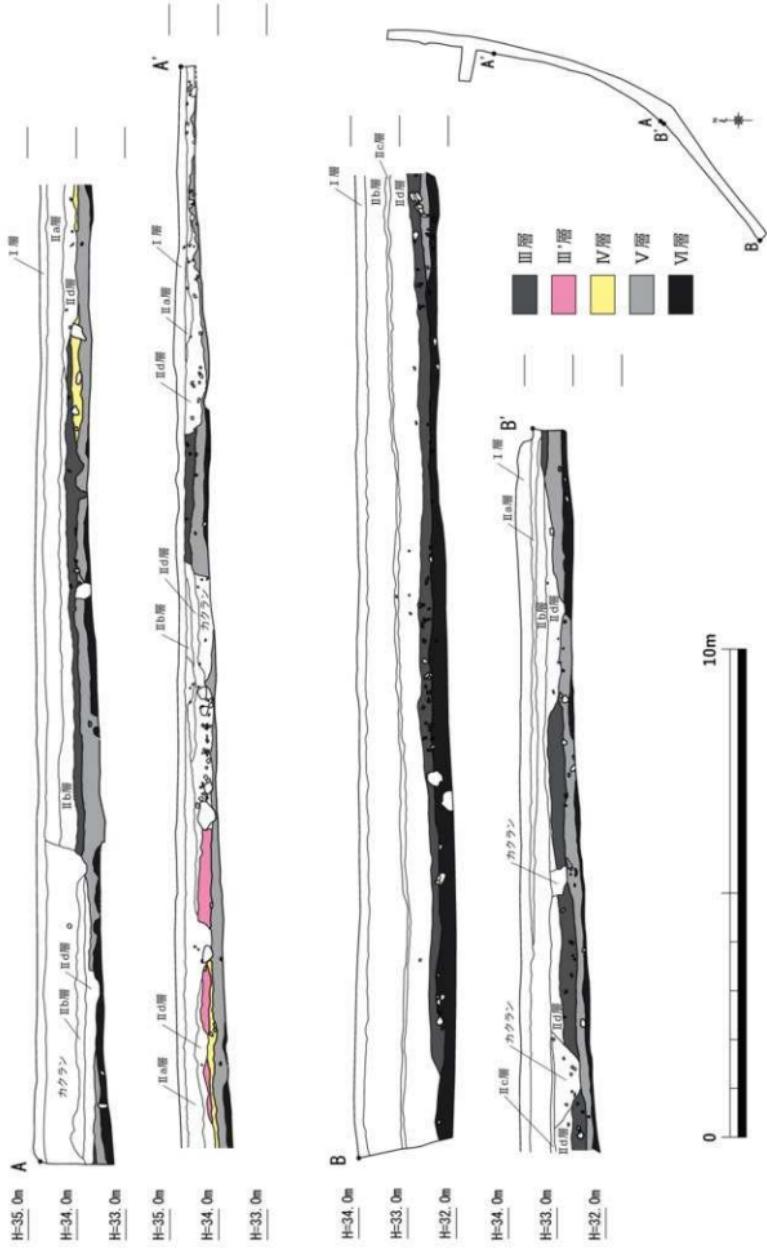
表土剥ぎは市建設課及び施工会社の協力のもと遺物包含層上面までバックホーによって行い、遺物包含層以下の層の掘削は人力で行った。土層、遺構、作業状況やその他調査上必要な記録は、適宜図面や写真として記録した。

本調査完了後は、道路工事の着工がすぐに控えていたため、埋め戻し作業は行わず事業主体者への現地引き渡しを行った。

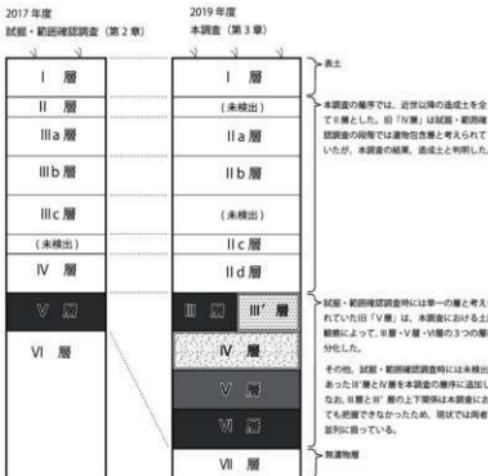
第2節 基本層序

試掘・範囲確認調査では検出されなかった貝層が本調査では検出されたことなどをうけ、層名の整理を行ったため、ここに示す層名は前章に示した試掘・範囲確認調査の層名とは異なっている。両者の対応関係は第6図に示す通りである。

- I 層 黄褐色土 (10YR4/4)。耕作土。
- II a層 黄褐色土 (10YR5/8)。造成土。
- II b層 黒色土 (10YR1.7/1)。造成土。
- II c層 黄褐色土 (10YR5/6)。造成土。
- II d層 暗褐色土 (10YR3/3)。細かく割れた弥生遺物を含み、調査区南側には厚く堆積する。調査段階では遺物包含層と考えられていたが、遺物の状況等から、田畠造成時にⅢ層を含む土層を掘削したのちに盛土し形成された層と考えられる。
- III 層 黑褐色土 (10YR2/2)。粘性が強く、乾燥すると固い。II d層と比較しきめの弥生遺物片を多量に含む。
- III' 層 貝層。カキ・アサリ・サザエ・ミナ等からなる。調査区の6A区～7B区で確認された。獸骨・弥生土器を含む。Ⅲ層とⅢ'層は、今回の調査では上下関係が不明であった。
- IV 層 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)。Ⅲ'層の下側を中心に6A区～7C区に薄く広がる。7C区では貝層は確認できないがIV層は確認できるため、貝層が7C層まで広がっていた可能性がある。
- V 層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性が強く、乾燥すると固い。弥生遺物を多量に含む。
- VI 層 黑褐色土 (7.5YR2/3)。粘性が強く、水はけが悪い。弥生遺物を多量に含む。
- VII 層 褐色土 (7.5YR4/6)。粘性が強く、乾燥すると固い。無遺物層。



第5図 調査区西壁土層断面図 (S=1/100)



第6図 試掘・範囲確認調査と本調査の土層対応関係

第3節 遺構

VI層上面及びVII層上面にて合計して20基のピットが検出された。SP1とSP2はVI層上面検出、SP3～SP20はVII層上面検出である。

(1) VI層上面検出遺構 (SP 1～SP 2)

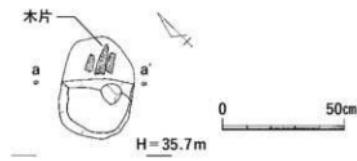
2基のピットを検出した。全て3区での検出である。SP2は検出面に木片が残存していた。加工痕等はみられない。その他の遺構内出土遺物としては、摩滅した弥生土器片などが出土したが、いずれも細片であり図化には至っていない。

(2) VII層上面検出遺構 (SP 3～SP20)

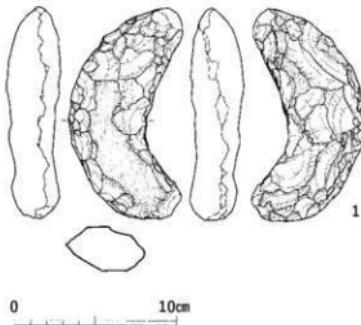
18基のピットを検出した。遺構内出土遺物としては、SP5から双角状器が出土した(第9図)。石材は安山岩で、最大長13.0cm、最大幅7.0cm、最大厚3.3cm、重量305.7gを測る。表裏面に自然面を残し、内湾部に潰痕が認められる。

第1表 遺構内出土遺物観察表

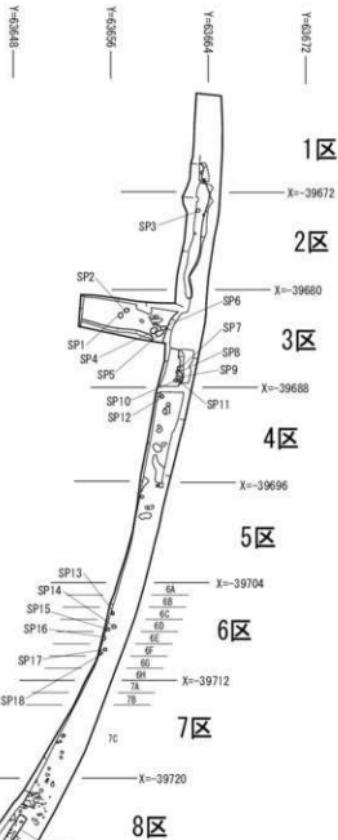
図	番号	器種	石材	地点	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
9	1	双角状器	安山岩	3	SP5	13.0	7.0	3.3	305.7



第8図 SP 2 遺構実測図 (S=1/20)



第9図 SP 5 出土遺物実測図 (S=1/3)



第7図 遺構配置図 (S=1/400)

第4節 包含層出土遺物

(1) 土器・土製品

縄文時代晚期の土器

1は浅鉢の口縁部から肩部の資料であり、口縁部にはリボン状突起を付す。外面は研磨する。2は深鉢の底部である。断面は外側に張り出し、上げ底となる。



第10図 包含層出土土器実測図① (S=1/3)

弥生時代の土器

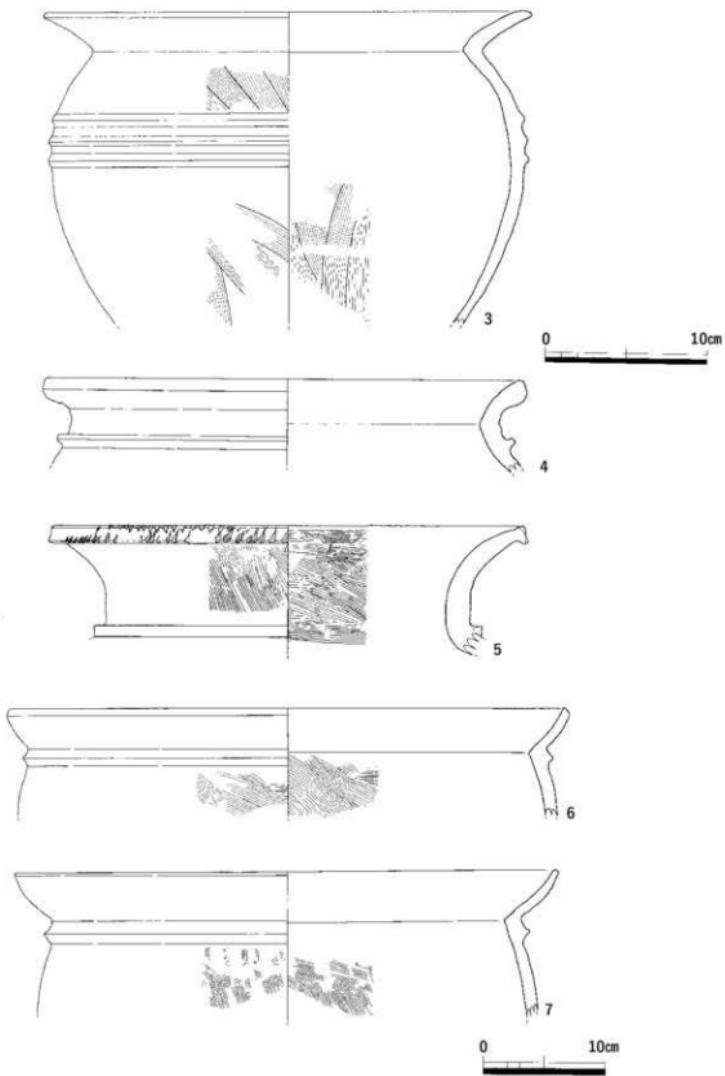
壺 (第11図～第13図 3～33)

3～14は突帯を持つ資料である。3は頸部の最大径部分に3条の断面三角形突帯を有する。4は頸部から口縁部にかけて肥厚し、頸部下に断面四角形の突帯を有する。5は頸部から大きく外反し、口縁端部を上下に肥厚させ、上下それぞれに刻み目を入れる。頸部には断面四角形の突帯がある。6～10はいずれも頸部下に断面三角形突帯を有し、頸部から口縁端部にかけて僅かに内湾する。11は丹塗り土器である。頸部から強く外側に屈曲する。頸部下には非常に小振りな断面三角形突帯を付している。12～14は胴部資料である。12は2条の突帯に刻目を施す。13は突帯部分で割れているが、2条の突帯を持つ資料であろう。14は丹塗りを施しており、断面三角形の突帯を2条付している。15～29は口縁部である。いずれも頸部で屈曲し外側に開く「く」の字状口縁部を持つ。また、胴部は縱または斜位のハケによって調整し、口縁部は横方向のナデ調整を行う。30～33はいずれも器壁が厚く重量感があり、胎土に雲母を含む。搬入土器であろう。

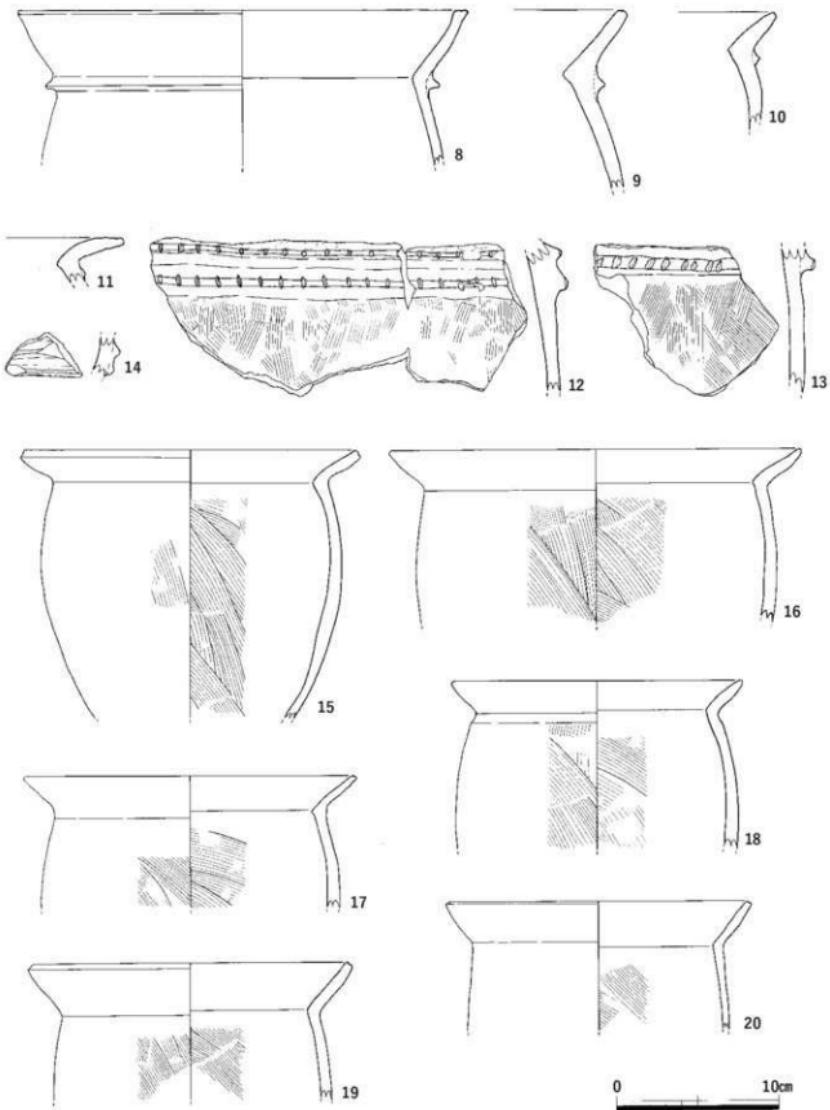
壺 (第14図～第15図 34～61)

34は小壺である。頸部でゆるく外反し、端部は断面先細りとなる。35～41は広口壺である。35は口縁が大きく外反し、胎土には粒の大きい石英・雲母を含む。36は焼成が良く堅緻である。口縁端部は面取りをしている。38～40は頸部から強く立ち上がり、逆L字状に外反する。いずれも頸部に小さい断面三角形突帯を有する。41は口唇部にヘラ状工具で文様を入れる資料である。

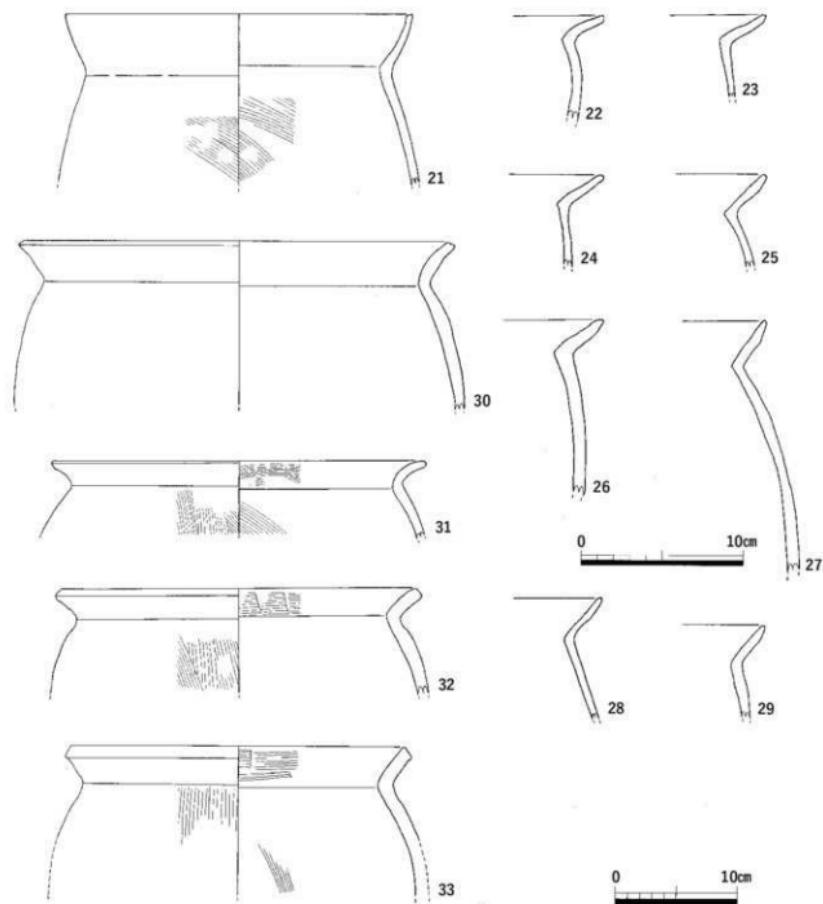
42～48は、短い頸部に口唇部をつまみ出したような形態を持つ小壺である。49は袋状口縁壺である。50～52は口縁部の資料で、端部を上下に肥厚させる。52は端部を上に引き上げ、複合口縁とする。53～57は複合口縁壺である。頸部から外反しながら立ち上がり、口縁部は上方向に屈曲する。56・57は口縁部下の屈曲部が発達して突帯状となり、工具による刻目を施す。58～61は文様を持つ壺である。58は長頸壺で、横方向櫛描文を外面に施す。内面は粘土帶積み上げの痕が顯著である。59・60は外面にヘラ状工具によるものと考えられる横方向沈線を施し、沈線間には縱方向の微細な線を有する。肥後地方の土器か。61は横方向櫛描文を外面に施し、内面には指圧痕が強く残る。



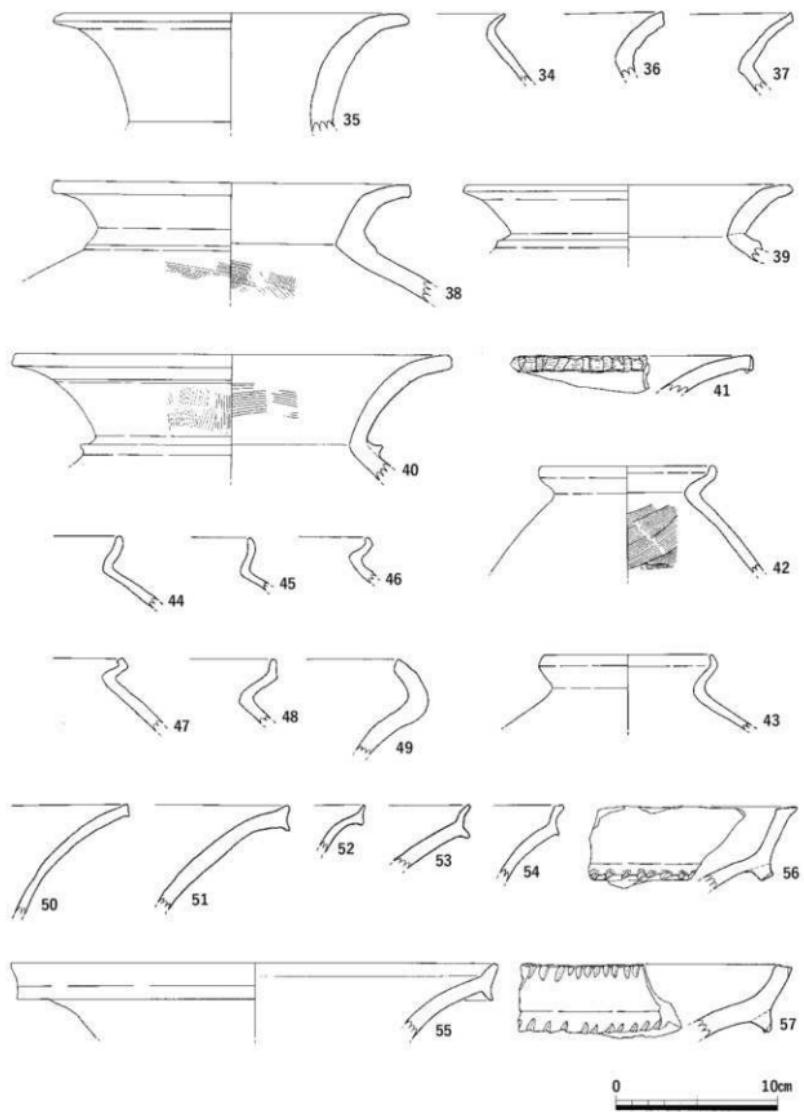
第11図 包含層出土土器実測図② (3 : S=1/3, 4~7 : S=1/4)



第12図 包含層出土土器実測図③ (S=1/3)



第13図 包含層出土土器実測図④ (21~30 : S=1/3, 31~33 : S=1/4)

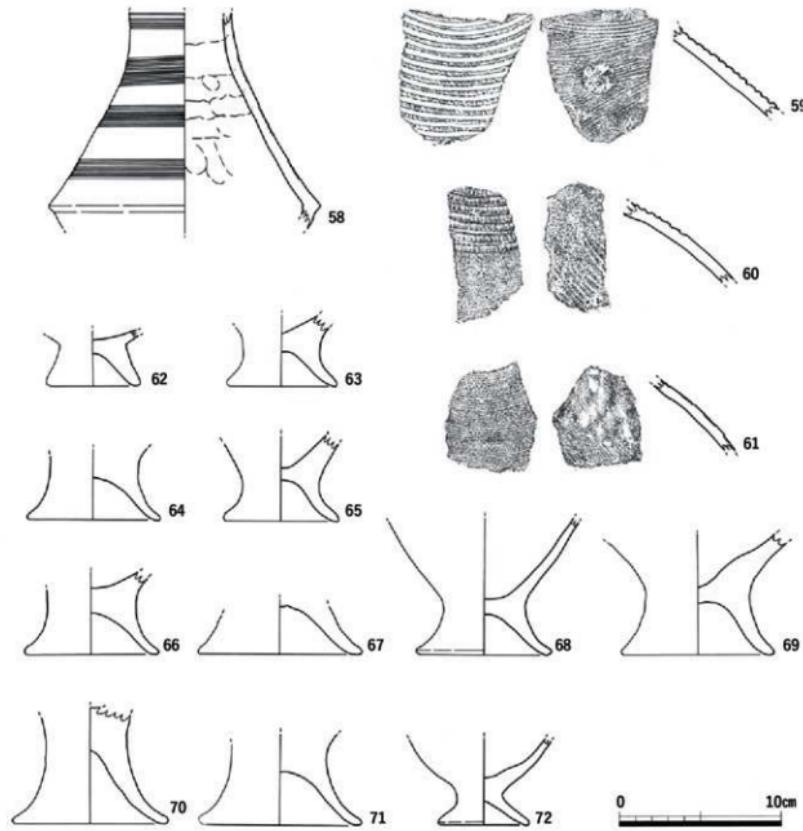


第14図 包含層出土土器実測図⑤ (S=1/3)

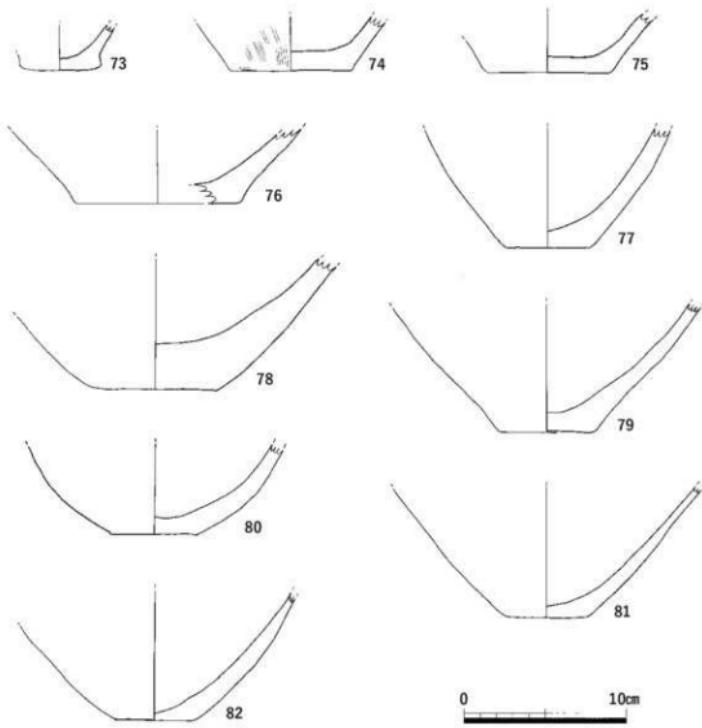
脚台部・底部（第15図～第16図 62～82）

62～72は台付壺脚台部の資料である。62は裾部の開きが狭く、直線的である。63～71は裾部が緩やかに開く。72は小振りであり、台付鉢・高坏等の可能性がある。

73～82は壺もしくは壺底部の資料であり、いずれも平底である。73は僅かに直線的に立ち上がったのち外傾する。78は器壁が厚く重量感があり、外面には炭化物が付着する。



第15図 包含層出土土器実測図⑥ (S=1/3)



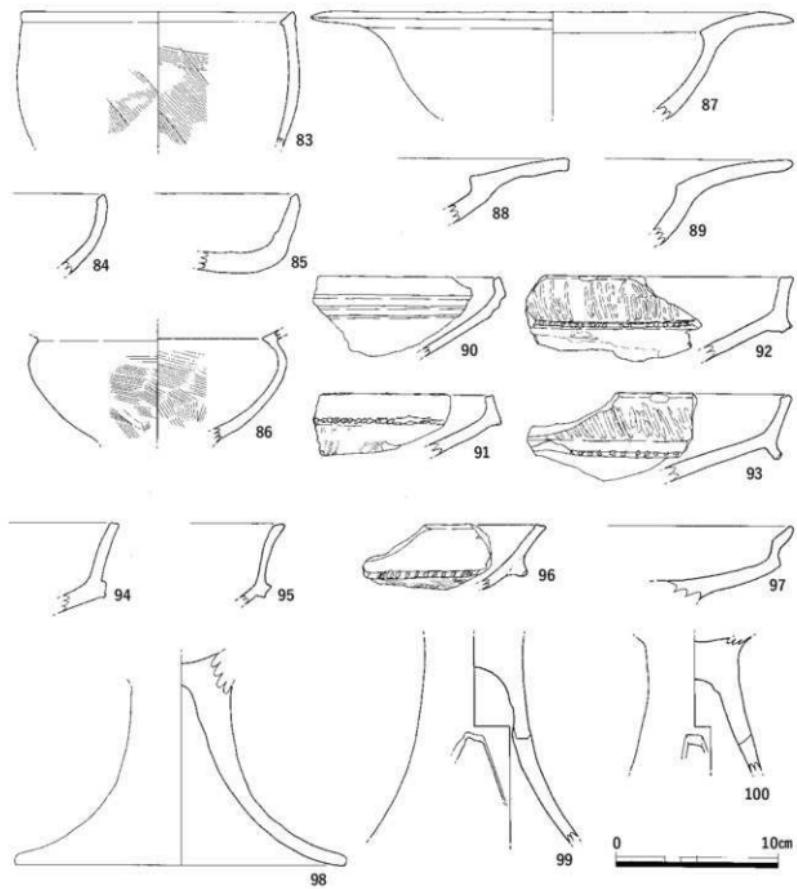
第16図 包含層出土土器実測図⑦ (S=1/3)

鉢 (第17図 83~85)

83~85は鉢である。83は深い身を持ち、口縁部は肥厚する。84は浅い碗状の鉢である。85は底部が平坦になり、皿に近い形状を持つものと思われる。

高坏 (第17図 86~100)

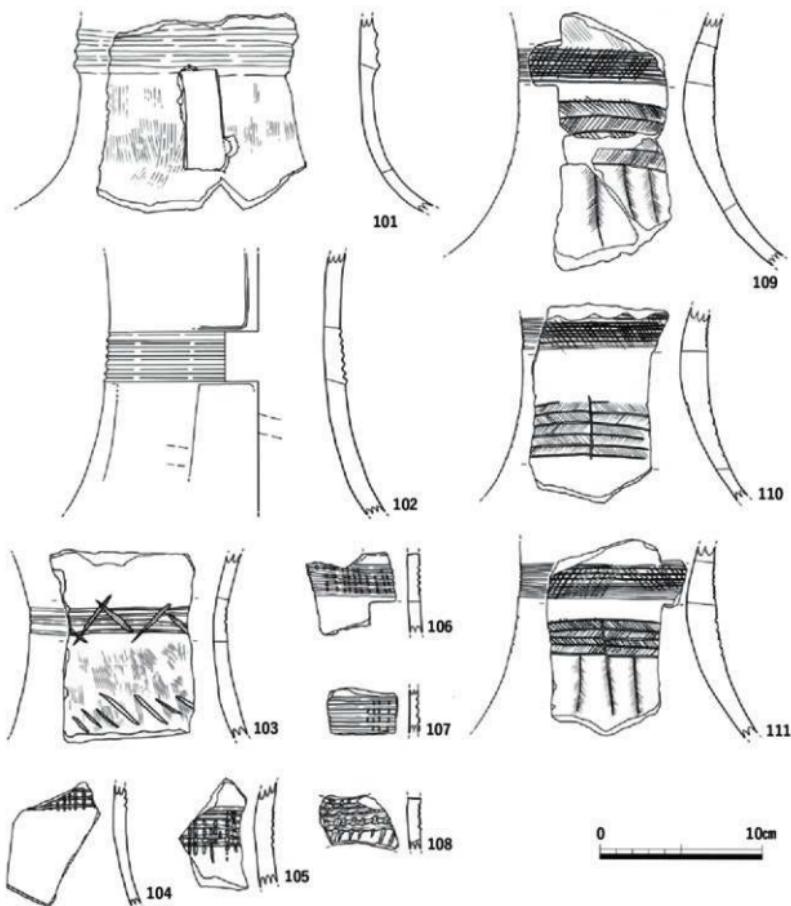
86は頸部で大きく外傾し、内面には黒色を施す。87~89は丸みを持つ坏部下半から大きく開く口縁部を有する。90は断面三角形の突帯を3条有し、坏部は鉢のような形状を持つ。91~96は坏の屈曲部に断面方形もしくはM字状の突帯を有する。91の坏上部は内傾し、突帯には刻みを施す。92~96は坏上部で外傾する。92・93・96の突帯には刻みを施す。98~100は脚部である。99は方形の透かしを3箇所有する。100は摩耗により明瞭ではないが、方形の透かしを4箇所持つものであろう。



第17図 包含層出土土器実測図⑧ (S=1/3)

器台（第18図 101～111）

器台はいずれも透かしを持つ。101は方形の透かしを持ち、体部に3条の断面三角形突帯を施す。102は方形の透かしを持つ。体部はヘラ書き直線文を5条施す。103は方形の透かしを持つものか。体

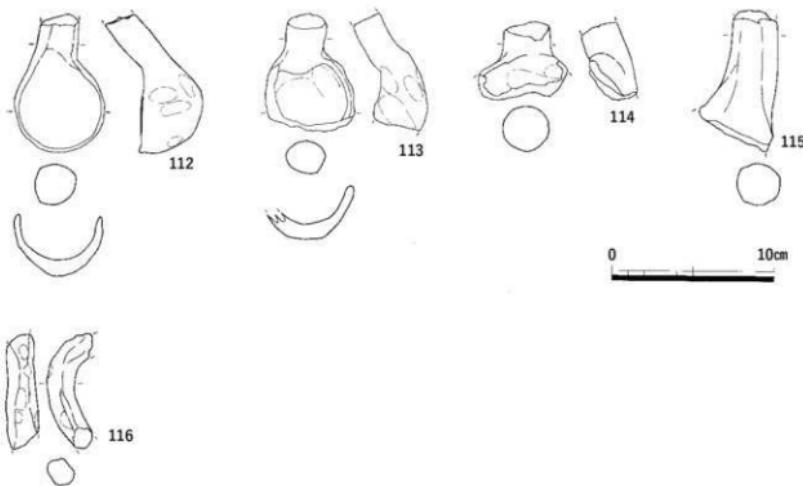


第18図 包含層出土土器実測図 9 (S=1/3)

部にはヘラ書き直線文を入れ、その上から斜位の線を入れる。104～108は体部に沈線を施す。108の縦方向線は斜位である。109～111は細く鋭い施文具で緻密な文様を施す。透かしは全て方形である。いずれも透かし間に5条ないし6条の横線を入れ、綾杉文状の文様で横線間を充填する。体部中央は横方向と斜位の線で格子状とする。109は体部下位に縦方向綾杉文状の文様を施している。110は透かし間の中心に縦線を入れる。111も体部下位に縦方向綾杉文状の文様を3箇所入れており、中央の線は透かし間の上部まで伸びる。

土製品（第19図 112～115）

112～115は杓子形土製品である。112は身部分が欠損せず残る。116は把手か。ジョッキの把手のように縦に付くものと考えられる。



第19図　包含層出土土製品実測図（S=1/3）

第2表 包含層出土土器・土製品観察表①

図 番号	器種	部位	地点	層位	文様・調査		色調		施土	備考		
					外側		内面					
					外側	内面	外側	内面				
10	浅鉢	口縁部	7C	V	研磨	ナゲ	黒褐	黒褐	角閃石・長石・石英	リボン状突起		
	深鉢	底部	7C	V	ナゲ	ナゲ	に赤い赤褐	赤褐	長石・石英・雲母			
11	甕	口縁部～胴部	7B	II	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	断面三角形突起		
	甕	口縁部～胴部	10	VI	ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	断面方形突起		
12	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	断面三角形突起		
	甕	口縁部～胴部	6G	V	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	断面三角形突起		
13	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	ナゲ	ナゲ	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	断面三角形突起		
	甕	口縁部～胴部	11	III	ハケメ・ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	長石・石英・雲母・赤色粒子	断面三角形突起		
14	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ	浅黄橙	灰褐	角閃石・長石	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	10	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ	浅黄橙	灰褐	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
15	甕	口縁部～胴部	6G	V	ハケメ・ナゲ	ハケメ	に赤い黄橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	6G	V	ハケメ・ナゲ	ハケメ	に赤い黄橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
16	甕	口縁部～胴部	5	III	ハケメ・ナゲ	ハケメ	に赤い黄橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	6H	III	ハケメ・ナゲ	ハケメ	暗灰褐	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
17	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	10	VI	ナゲ	ナゲ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
18	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ	暗灰褐	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
19	甕	口縁部～胴部	10	VI	ナゲ	ナゲ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	10	VI	ナゲ	ナゲ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
20	甕	口縁部～胴部	10	VI	ナゲ	ナゲ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	10	VI	ナゲ	ナゲ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
21	甕	口縁部～胴部	10	III	ハケメ・ナゲ	ナゲ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	7C	V	ハケメ	ハケメ・ナゲ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
22	甕	口縁部～胴部	5	III	ハケメ	ハケメ・ナゲ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	5	III	ハケメ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
24	甕	口縁部～胴部	5	III	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	10	VI	ナゲ	ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
25	甕	口縁部～胴部	6H	III	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
26	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
27	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	11	VI	ナゲ	ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
28	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
29	甕	口縁部～胴部	10	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	7C	V	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い黄橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹塗り土器		
31	甕	口縁部～胴部	5	V	ハケメ・ナゲ	ハケメ	ナゲ	ナゲ	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	5	V	ハケメ・ナゲ	ハケメ	ナゲ	ナゲ	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	丹塗り土器		
32	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	石英・雲母・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	7C	III	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	石英・雲母・赤色粒子	丹塗り土器		
33	甕	口縁部～胴部	10	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ	に赤い焼橙	に赤い黄	石英・雲母・赤色粒子	丹塗り土器		
	甕	口縁部～胴部	10	VI	ナゲ	ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	石英・雲母・赤色粒子	丹塗り土器		
34	甕	口縁部～胴部	10	VI	—	—	—	—	角閃石・長石・石英	小口		
	甕	口縁部～胴部	5	V	ハケメ・ナゲ	—	に赤い焼橙	に赤い黄	長石・石英・雲母・赤色粒子	広口		
35	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ	灰白	灰白	角閃石・長石・石英	広口		
	甕	口縁部～胴部	8	V	ナゲ	ナゲ	舞	舞	角閃石・長石・石英・赤色粒子	広口		
37	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ	灰白	灰白	角閃石・長石・石英	広口		
	甕	口縁部～胴部	11	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ	灰白	灰白	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	広口		
38	甕	口縁部～胴部	10	VI	ハケメ・ナゲ	ナゲ	に赤い焼橙	に赤い黄	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	広口		
	甕	口縁部～胴部	5	III	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	舞	舞	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	広口		
40	甕	口縁部～胴部	10	VI	ハケメ・ナゲ	ハケメ・ナゲ	舞	舞	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	広口		

第3表 包含層出土土器・土製品観察表②

団	番号	器種	部位	地点	層位	文様・調査		色調		施土	備考		
						外面		内面					
						外面	内面	外面	内面				
41	壺	口縁部	II	V	ナデ	ハケメ・ナデ	に赤い擦	に赤い擦	角閃石・長石・石英・雲母	角閃石	広口壺		
42	壺	口縁部・胴部	10	V	—	ハケメ・ナデ	明赤闇	橙	長石・石英・雲母・赤色粒子				
43	壺	口縁部・胴部	9	V	—	—	明赤闇	橙	角閃石・長石・石英・雲母				
44	壺	口縁部・胴部	5	III	ナデ	ハケメ・ナデ	に赤い擦	に赤い擦	角閃石・其石・石英・赤色粒子				
45	壺	口縁部・胴部	5	III	ナデ	ハケメ・ナデ	に赤い擦	に赤い擦	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子				
46	壺	口縁部・胴部	3	III	ナデ	ナデ	橙	橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
47	壺	口縁部・胴部	11	III	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
48	壺	口縁部・胴部	11	III	ナデ	ナデ	明赤闇	明赤闇	角閃石・長石・石英				
49	壺	口縁部	10	III	ハケメ・ナデ	ナデ	橙	に赤い擦	角閃石・長石・石英・赤色粒子	袋状口縁壺			
50	壺	口縁部	10	V	ナデ	—	橙	橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
51	壺	口縁部	11	V	ハケメ・ナデ	ナデ	橙	に赤い擦	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
52	壺	口縁部	11	III	ナデ	—	浅黄橙	橙	角閃石・其石・石英・赤色粒子	複合口縁壺			
53	壺	口縁部	10	V	—	ナデ	褐灰	黄橙	角閃石・長石・石英	複合口縁壺			
54	壺	口縁部	11	V	ナデ	ナデ	褐灰	に赤い擦	角閃石・長石・石英・赤色粒子	複合口縁壺			
55	壺	口縁部	10	III	ナデ	ナデ	橙	に赤い擦	角閃石・其石・石英・赤色粒子	複合口縁壺			
56	壺	口縁部	10	III	ナデ	—	橙	橙	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	複合口縁壺			
57	壺	口縁部	10	V	ナデ	ナデ	橙	橙	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	複合口縁壺			
58	壺	胴部	61	II	ナデ・沈穢	ナデ・鶴頭	に赤い擦	に赤い擦	角閃石・長石・石英・雲母	長斯壺			
59	壺	胴部	11	V	沈穢	ハケメ	に赤い擦	浅黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
60	壺	胴部	6C	V	沈穢	ハケメ	灰赤闇	黑闇	角閃石・長石・石英・雲母				
61	壺	胴部	11	V	沈穢	ハケメ	に赤い黄橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
62	壺	脚台部	3	III	ナデ	ナデ	明赤闇	明赤闇	長石・石英・雲母	台付壺			
63	壺	脚台部	11	V	ナデ	ナデ	に赤い擦	に赤い擦	角閃石・長石・石英・赤色粒子	台付壺			
64	壺	脚台部	10	V	ナデ	ナデ	に赤い擦	—	角閃石・長石・石英・赤色粒子	台付壺			
65	壺	脚台部	10	V	ナデ	ナデ	に赤い黄橙	浅黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	台付壺			
66	壺	脚台部	9	V	ナデ	ナデ	に赤い擦	に赤い擦	角閃石・長石・石英・赤色粒子	台付壺			
67	壺	脚台部	10	V	ナデ	ナデ	に赤い擦	に赤い擦	角閃石・長石・石英・赤色粒子	台付壺			
68	壺	脚台部	10	V	ナデ	ナデ	橙	褐灰	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	台付壺			
69	壺	脚台部	7C	V	ナデ	ナデ	に赤い黄橙	に赤い擦	角閃石・長石・石英・赤色粒子	台付壺			
70	壺	脚台部	10	V	ナデ	ナデ	に赤い擦	褐灰	角閃石・長石・石英・赤色粒子	台付壺			
71	壺	脚台部	11	V	ナデ	ナデ	に赤い黄橙	褐灰	角閃石・長石・石英・赤色粒子	台付壺			
72	壺カ	脚台部	10	III	ナデ	ナデ	浅黄橙	に赤い黄橙	長石・石英・雲母・赤色粒子	台付壺・高环刃			
73	—	底部	8	V	ナデ	ナデ	に赤い黄橙	灰黄闇	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
74	—	底部	10	V	ハケメ・ナデ	ナデ	橙	橙	長石・石英・雲母				
75	—	底部	7C	III	ナデ	ナデ	に赤い黄橙	灰白	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
76	—	底部	5	III	ナデ	—	に赤い黄橙	橙	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子				
77	—	底部	7C	V	ナデ	ナデ	に赤い擦	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
78	—	底部	11	V	ナデ	ナデ	に赤い黄橙	灰白	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
79	—	底部	5	V	ナデ	—	に赤い黄橙	灰黄闇	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子				
80	—	底部	7B	III	ナデ	ナデ	褐色灰	橙	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子				

第4表 包含層出土土器・土製品觀察表③

図	番号	器種	部位	地点	層位	文様・調査		色調		施土	備考
						外面	内面	外面	内面		
16	81	—	底部	5	V	ハケメ・ナデ	ナデ	に赤い黄橙	に赤い橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	82	—	底部	5	Ⅲ	ハケメ・ナデ	ナデ	に赤い橙	に赤い橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	83	鉢	口縁部～胴部	5	V	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	に赤い黄橙	灰青闇	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	84	鉢	口縁部	7A	V	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	に赤い黄橙	闇	角閃石・其石・石英・赤色粒子	
	85	鉢	口縁部～底部	10	Ⅵ	ナデ	ナデ	に赤い橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	86	高环	腹部～胴部	7C	V	ハケメ・ナデ	ハケメ	に赤い黄橙	黒	長石・石英・雲母	
	87	高环	口縁部～环部	8	V	ナデ	ナデ	に赤い橙	に赤い橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	88	高环	口縁部～环部	11	Ⅵ	ハケメ・ナデ	ナデ	稜	稜	角閃石・長石・石英	
	89	高环	口縁部～环部	5	V	—	ナデ	黄橙	に赤い橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	90	高环	口縁部～环部	5	Ⅲ	—	—	明赤闇	明赤闇	角閃石・長石・石英	3条の断面三角形容
17	91	高环	口縁部～环部	11	Ⅵ	ハケメ・ナデ	ナデ	に赤い橙	稜	角閃石・其石・石英・雲母・赤色粒子	刻目を有する突帯
	92	高环	口縁部～环部	11	Ⅵ	ナデ・繪文	ナデ	に赤い黄橙	に赤い黄橙	角閃石・其石・石英・雲母	刻目を有する突帯
	93	高环	口縁部～环部	11	Ⅲ	ナデ・繪文	繪物	に赤い橙	に赤い橙	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	刻目を有する突帯
	94	高环	口縁部～环部	10	Ⅲ	ナデ	ナデ	稜	稜	角閃石・長石・石英・赤色粒子	突帯
	95	高环	口縁部～环部	10	Ⅲ	ナデ	ナデ	明赤闇	に赤い稜	角閃石・其石・石英・赤色粒子	突帯
	96	高环	口縁部～环部	11	Ⅲ	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	に赤い黄橙	に赤い黄橙	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	刻目を有する突帯
	97	高环	口縁部～环部	8	V	ナデ	ナデ	に赤い黄橙	に赤い黄橙	角閃石・其石・石英	
	98	高环	脚部～胴部	7C	V	—	—	に赤い橙	闇	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	99	高环	脚部	10	Ⅲ	—	ナデ	明赤闇	明赤闇	角閃石・其石・石英・雲母・赤色粒子	方形透かし 3箇所+
	100	高环	脚部	2	Ⅲ	—	—	稜	稜	長石・石英・赤色粒子	方形透かし 4箇所+
18	101	器台	体部	11	Ⅵ	ハケメ・ナデ	—	稜	稜	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	方形透かし
	102	器台	体部	11	Ⅵ	ナデ・沈綿	ナデ	明赤闇	明赤闇	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	方形透かし 4箇所+
	103	器台	体部	10	Ⅵ	ナデ・沈綿	ハケメ・ナデ	稜	に赤い橙	長石・石英・赤色粒子	斜紋の沈綿
	104	器台	体部	10	Ⅵ	沈綿	指頭	稜	稜	長石・石英・雲母・赤色粒子	方形透かし
	105	器台	体部	10	Ⅵ	ナデ・沈綿	ナデ	稜	稜	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	方形透かし
	106	器台	体部	10	Ⅵ	ナデ・沈綿	ナデ	稜	稜	角閃石・長石・石英	方形透かし
	107	器台	体部	10	Ⅲ	沈綿	ナデ	稜	稜	角閃石・長石・石英・赤色粒子	方形透かし
	108	器台	体部	11	Ⅵ	沈綿	ナデ	稜	に赤い橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	方形透かし+?
	109	器台	体部	10	Ⅵ	沈綿・斜綱	ハケメ	稜	稜	長石・石英	織紋文状文様
	110	器台	体部	10	Ⅲ	沈綿・斜綱	ハケメ	稜	稜	長石・石英・赤色粒子	織紋文状文様
19	111	器台	体部	11	Ⅵ	沈綿・斜綱	ハケメ	稜	稜	長石・石英・赤色粒子	織紋文状文様
	112	杓子	匙部	7C	V	面網	指頭	に赤い黄橙	稜	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	
	113	杓子	匙部	8	V	面網	指頭	稜	稜	長石・石英	
	114	杓子	匙部	10	Ⅵ	面網	指頭	稜	稜	長石・石英・雲母・赤色粒子	
	115	杓子	柄部	11	Ⅵ	面網	指頭	稜	稜	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	116	—	把手	8	V	面網	指頭	に赤い黄橙	—	角閃石・長石・石英・赤色粒子	

(2) 石器

1～5は双角状礫器である。4は玄武岩製、他は安山岩製である。いずれも表裏面に自然面を残し、2か所の角部を作出している。

1は表裏面に自然面を残し、片方の角部を欠く。残存する方の角部には使用の痕跡は認められない。側辺稜線上に敲打痕が認められるが、内湾部側に集中する。2は上位の角部に摩耗が認められ、内湾部に潰痕が形成される。3は全体に摩耗を受けている。内湾部に潰痕が認められる。4の下位の角部は端部を欠損している。上位の角部は強く摩耗しており、その周辺に多数の線条痕が認められる。内湾部には潰痕が集中する。5は両角部と外反部中央が強く摩耗している。内湾部には潰痕が認められる。

6は安山岩製のスレイバーで、自然面を打面に作出された横長剥片を素材としており、その片方の側辺と末端に調整剥離を施す。

7はサヌカイト製の石鎌である。両側辺から整形を行っており、脚部は片方を欠くが、基部はやや内湾するものと思われる。

8は打製石斧である。安山岩製で幅5cm弱の短冊形をなす。片面には自然面を残す。全体に摩耗が及んでおり、刃部・基部を途中で入れ替えて使用したものと考えられる。9は砂岩製の円盤状石器で、片面には研ぎ面を有しており、おそらくは砥石からの剥落石材を素材としたものであろう。側縁は摩耗面が残存するが、それを除去するように新たな剥離が施されている。

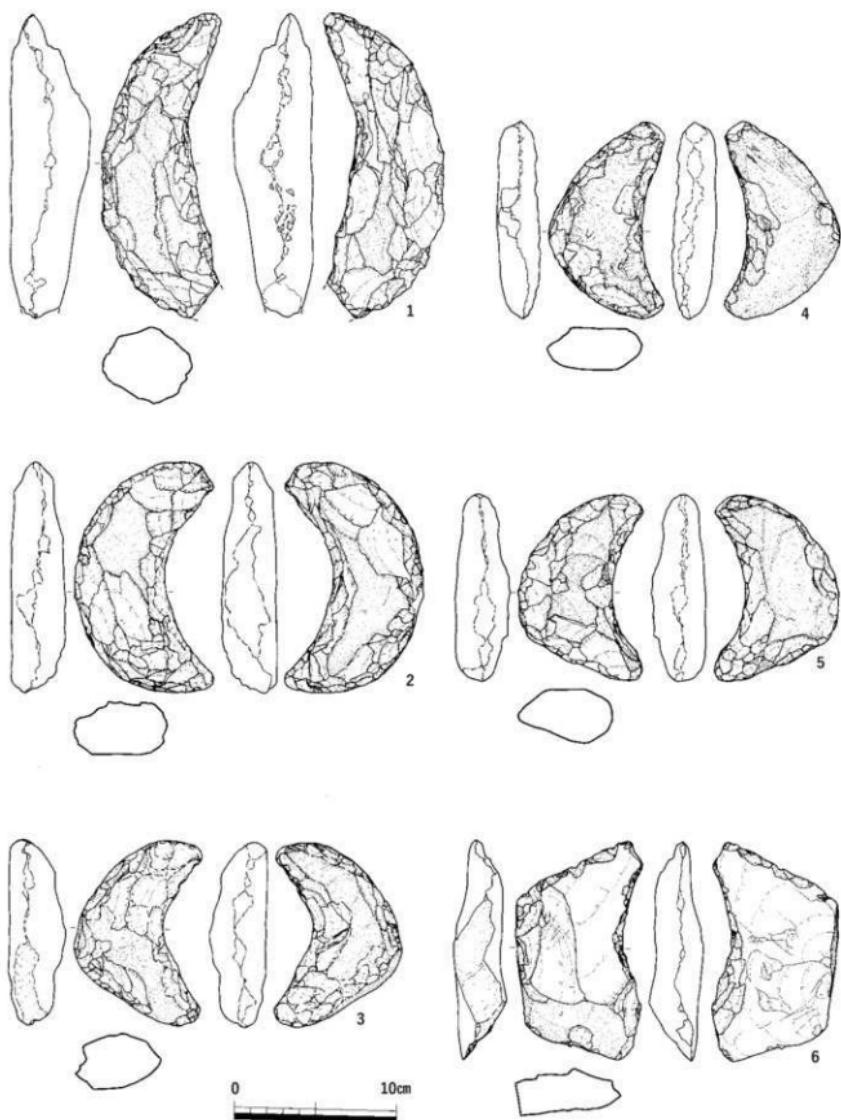
10は砂岩製で滑面をもつことから、砥石・石皿として用いられたものと思われる。また、平坦面に多数の潰痕がみられることから、のちに台石として転用されたものと考えられる。11は目の細かい砂岩製の砥石である。板状をなし、表裏面および側面に研ぎ面をもつ。

12は安山岩製の磨石・敲石である。表面は磨り面をもち、潰痕も認められる。裏面は残存状況が良くないが、平坦となるようである。13は安山岩製で、扁平な形状をなす。表裏面に磨り面が認められる。

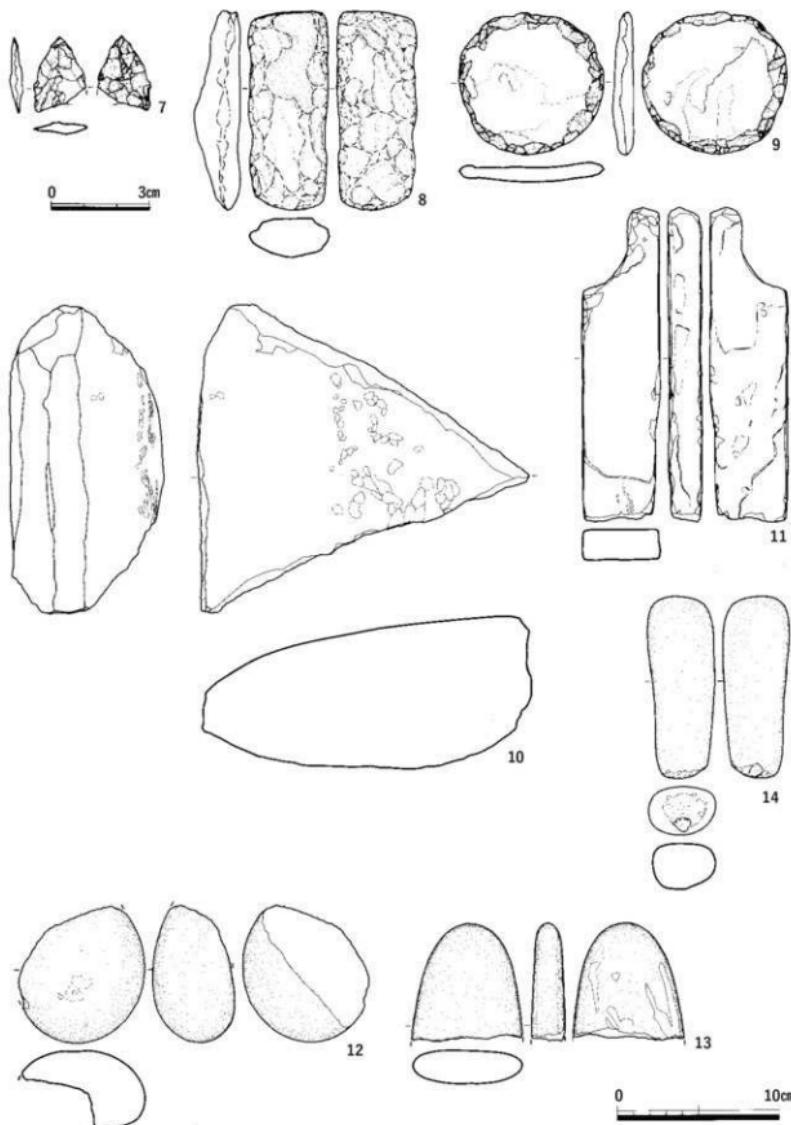
14は砂岩製で棒状をなし、一方の端部に潰痕が認められる。

第5表 包含層出土石器観察表

図	番号	器種	石材	地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
20	1	双角状礫器	安山岩	7C	III	18.7	7.4	4.9	651.6
	2	双角状礫器	安山岩	9	VI	14.7	8.5	3.4	469.9
	3	双角状礫器	安山岩	7C	V	11.3	7.8	3.5	317.6
	4	双角状礫器	玄武岩	5	III	12.1	7.1	2.6	258.8
	5	双角状礫器	安山岩	7C	V	11.5	7.7	3.4	300.6
	6	スクレイバー	安山岩	7C	V	13.4	7.7	3.3	341.9
21	7	石鎌	安山岩	7C	V	2.3	1.6	0.4	1.0
	8	打製石斧	安山岩	7C	V	12.1	4.9	2.9	221.6
	9	円盤状石器	砂岩	7C	V	8.7	8.9	1.3	113.5
	10	砥石・石皿・台石	砂岩	7C	V	20.4	19.0	9.5	3249.5
	11	砥石	砂岩	3	III	19.3	4.8	2.1	349.0
	12	磨石・敲石	安山岩	7C	V	8.4	7.8	5.1	321.3
	13	磨石・敲石	安山岩	9	VI	7.2	6.8	2.1	143.3
	14	敲石	砂岩	10	VI	11.2	4.1	3.0	216.5



第20図 包含層出土石器実測図① (S=1/3)

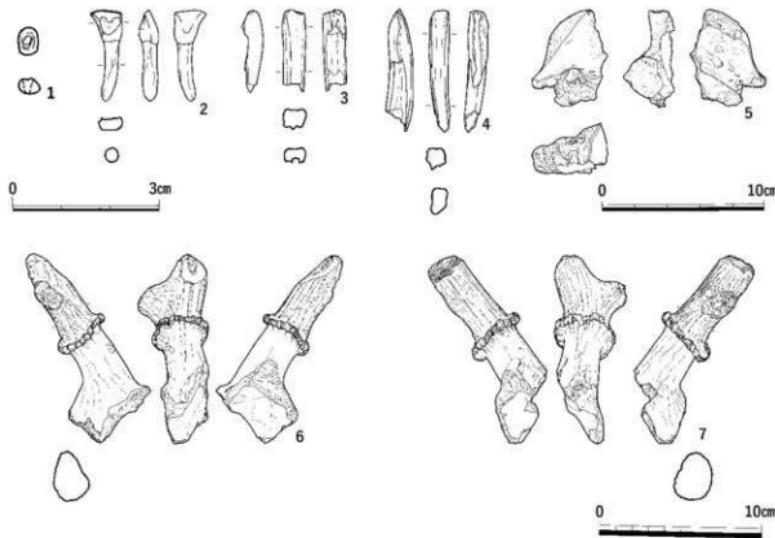


第21図 包含層出土石器実測図② (7: S=2/3, 8~14: S=1/3)

(3) その他

1は淡青色のガラス小玉である。外径は最大で0.6cm、内径は最大で0.4cmを測る。

2～7は獸骨類である。2はニホンジカの第1切歯の左側である。3はイノシシの第1切歯、4は第2切歯である。咬耗があまり見られないため1才前後の幼獣～若獣と思われる。5は上顎骨の切歯部分の破片で、種までの特定は困難であるが、歯の並びや形態的特徴からイヌ科等の小～中型哺乳類の可能性がある。6～7はニホンジカの角部～頭頂骨の一部である。6は左側、7は右側で、出土地点が近接していることなどから同一個体と考えられる。ともに角部には切断痕がみられ、頭頂骨には切削痕が数条残る。



第22図 包含層出土その他遺物実測図 (1: S=1/1, 2~5: S=2/3, 6~7: S=1/3)

第6表 包含層出土ガラス小玉観察表

図	番号	色調	地点	層位	外径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
22	1	淡青	V	VI	0.6	0.4	0.3	0.1g未満

第7表 包含層出土獸骨類観察表

図	番号	地点	層位	種名	部位	部分	L R	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
22	2	6G	V	ニホンジカ	鹿頭骨	切歯	L	2.8	1.0	0.6	0.6	下顎第1切歯
	3	11	VI	イノシシ	鹿頭骨	切歯	R	2.5	0.7	0.6	1.0	下顎第1切歯・1才前後
	4	6G	V	イノシシ	鹿頭骨	切歯	R	3.7	0.7	0.8	1.5	下顎第2切歯・1才前後
	5	11	VI	哺乳類	上顎骨	切歯部分	L	2.9	2.3	1.5	2.2	小～中型哺乳類類
	6	11	VI	ニホンジカ	頭骨+角	頭骨+角頭骨の一部	L	11.6	7.8	4.3	56.1	雄・2才以上
	7	11	VI	ニホンジカ	頭骨+角	角+角座部+頭頭骨の一部	R	11.6	7.3	4.4	65.2	雄・2才以上

図 版



遺跡上空から岩戸山方向を望む（北から）

圖版 2



TP.1 東壁



TP.2 北壁



TP.3 北壁



TP.4 北壁



TP.5 北壁



TP.6 北壁



TP.7 北壁



TP.8 南壁

試掘・範囲確認調査調査坑土層



6 A ~ 6 H 区 西壁土層



4~8 区VII層上面 遺構完掘状況（南から）

本調査写真①

図版 4



3区VI層上面 SP 2検出状況（南から）



6区VII層上面SP 5~10完掘状況（南から）



遺物出土状況①



遺物出土状況②



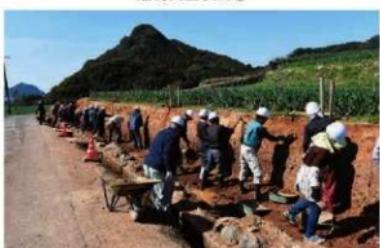
遺物出土状況③



遺物出土状況④

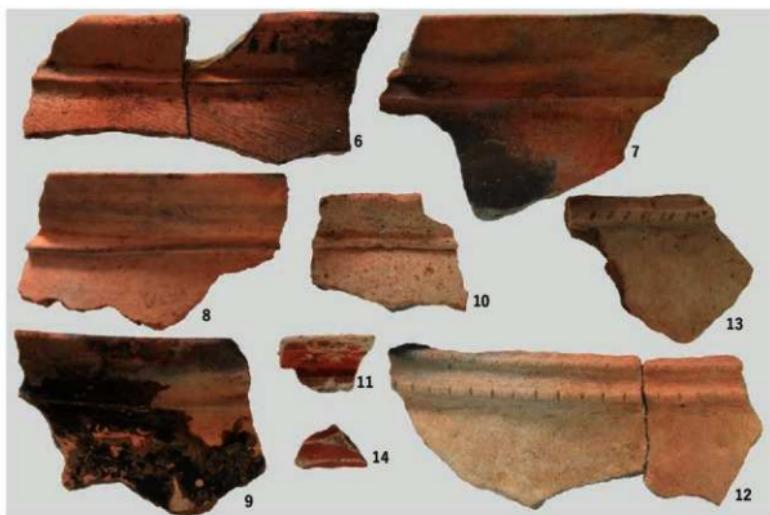


作業状況①



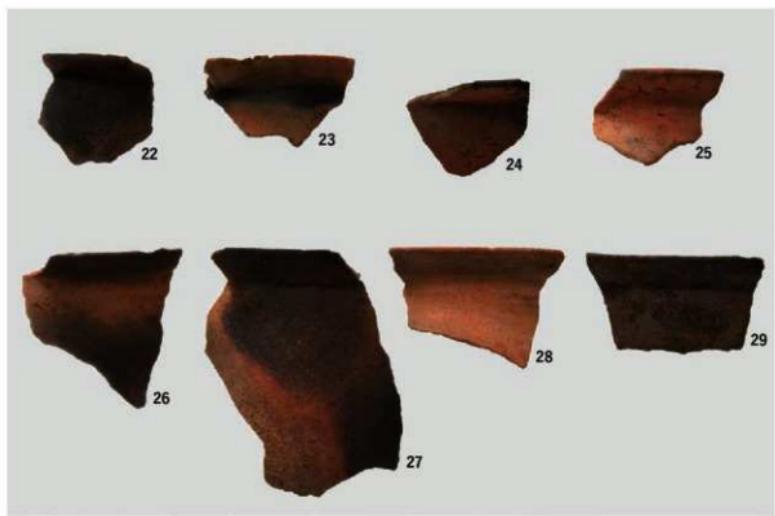
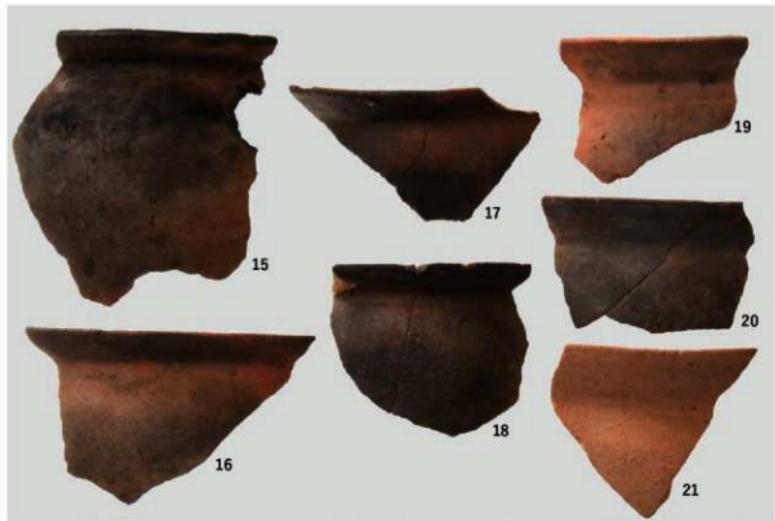
作業状況②

本調査写真②

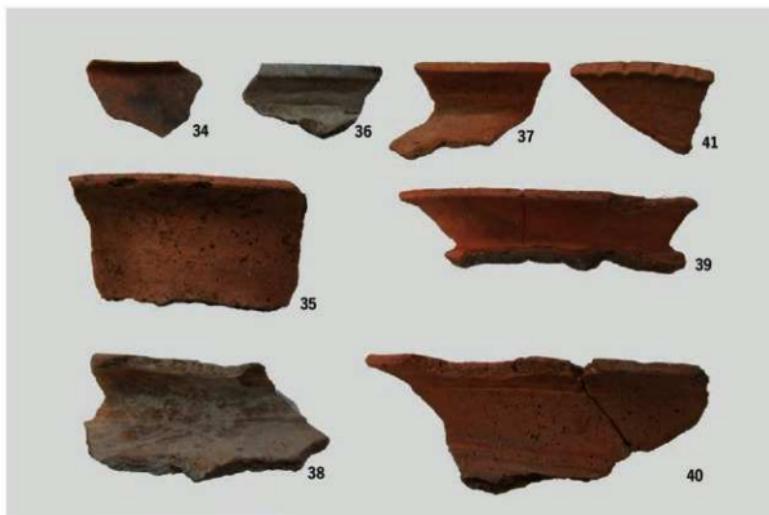


包含層出土土器・土製品①

圖版 6



包含層出土土器・土製品②

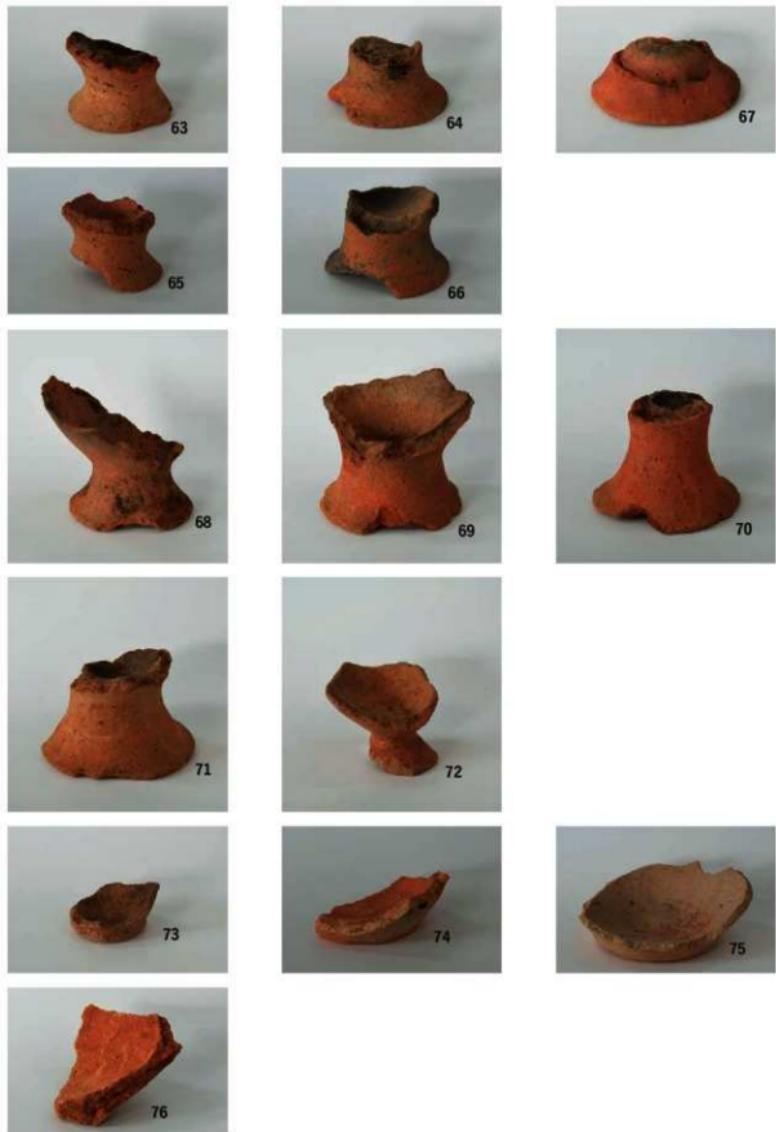


包含層出土土器・土製品③

圖版 8

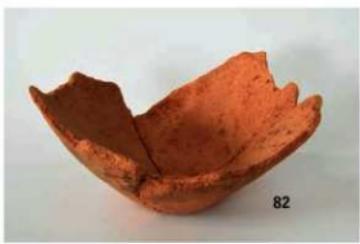
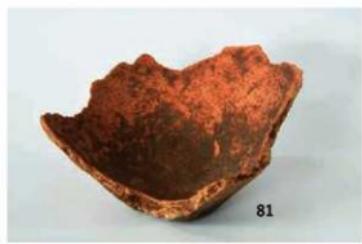


包含層出土土器・土製品④



包含層出土土器・土製品⑤

图版10



包含层出土土器・土製品⑥



包含層出土土器・土製品⑦

图版12



包含层出土土器・土製品⑧



包含層出土石器

図版14



包含層出土その他遺物

報告書抄録

ふりがな	うちのかいづか（だいいちぶんさつ）							
書名	内野貝塚（第一分冊）							
副書名	市道新田内野線道路改良事業に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	小川慶晴, 竹村南洋							
編集機関	長崎県南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL 0957-73-6705							
発行年月日	西暦2021年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積	調査原因
うちのかいづか 内野貝塚	南島原市 加津佐町	市町村 42214	遺跡番号 007	32° 38' 26"	130° 10' 44"	20191109 ～ 20200228	288m ²	市道改良 事業
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
内野貝塚	貝塚	縄文時代 弥生時代		ピット		縄文土器 弥生土器 石鎌 双角状蝶器 鹿角 獸歯		

南島原市文化財調査報告書 第23集

内野貝塚（第一分冊）

2021.3.31

発行 長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地
印刷 謙早印刷株式会社

